センチメンタル・ジャーニィ（Ⅱ）

——フランスとイタリーを巡るヨーリック師の旅——

ローレンス　スターン　作
小　林　　亨　訳

馬車置場の戸口

カレー

わたしはその間中，女性の手を離さなかった。あまり長い間つかんでいたので，先づその手に唇を押しあてないで離してしまうのは，まことに失礼なことになったであろう。それで実行してみると，彼女から引き離されていた情熱と生命感とが一挙に彼女にもどって来た。

その時，さきに馬車置場でわたしに話かけた二人の旅行者が，たまたま傍を通りかかり，わたし達のやりとりを見てとると，わたし達がすくなくとも夫婦に違いないと自然に考えた。それで馬車置場の戸口の所へやってくると，立ちどまって，その中の一人詮索好きの旅行者が，あなた方は明日の朝パリへお立ちになるんですか？　と訊ねた——自分のことしか答えられませんね，とわたしは言った。そうすると，わたくしはアミアンに参りますの，とその女性がつけ加えた。——私共は昨日そこで食事をしましたよ，と単なる旅行者が言った——もう一人の旅行者がつけ加えて言った，パリへ行く道筋で必ずその町を通りますよ，わたしは，「アミアンがパリへ行く街道筋にある」ということを知らせてくれたことに，千万遍も感謝の言葉を述べようと思った。しかし煙草を一つかみ嗅ごうと例の貧しい僧の煙草入れを取り出すと——わたしは彼らに静かにおじぎをして，ドーバーへの無事を祈った——彼らはわたし達を残して去って行った——

――もしわたしが，その哀しみに打ちひしがれた女性に，自分の馬車に同乗するように頼んだとしても，どこにさしさわりがあろうか？　とわたしは独り考えた――一体どんな悪いことが起ろうというのだ？

この提案を心に示すと，わたしの本性にあるあらゆるけがらわしい情慾やあくどい性質が，すわ一大事と騒ぎ立てた――三頭目の馬が必要になって財布が20リーヴル軽くなるぜ，と「貧慾」が言った。――お前は彼女が何物だか知らないじゃないか，と「用心」が言った――それにどんな災難にまき込まれるかも分らんくせに，と「臆病」がささやいた――

本当だよヨーリック！　お前が情人とかけ落ちして，それで手筈通りカレーに来たと噂されるぞ，と「分別」が言った。

――「偽善」は大きな声で叫んだ，今後は世間様に顔向けが出来ないぞ――「卑屈」がそれを引きとって言った，教会じゃ出世の見込みはないね――しらみたかりの受録僧どまりだ，と「自尊心」が吐きすてた。

――でもこれは親切なことなんだ――とわたしは言ってやった――それにわたしは総じて初めの衝動から行動するので，心を堅く閉じるほか何の役にも立たないような策動にはめったに耳を傾けることはしない――それで直ぐにその女性に向き直った――

――ところが彼女は，色々な言い分が申し立てられている間に，ひっそりと歩み去って，わたしが決論に達した時には，すでに10歩か12歩歩いていた。それでわたしは，出来るだけうまい言葉を駆使して彼女にその提案をしようと，大股に彼女の後を追った。しかし彼女が掌に頬を半ば当てて――物想いにふける様子でゆっくりと小刻みの歩幅で，一歩一歩地面をじっと見つめながら歩いて行くのを見ると，彼女も同じ問題を考えているのだということが思い浮んだ。――可愛想に！　彼女にもわたし同様，折にふれて相談しなくてはならない姑とか偽善的な叔母とか愚かな年寄りとかがいるんだ，とわたしは心の中で叫んだ。そこで彼女の考えを邪魔したくなかったし，突然話しかけて驚かすよりも冷静な時に話しかけた方が穏当であると考えて，あたりを見廻わしてから馬車置場の前を一二度行ったり来たりしていた。その間にも，彼女は物想いにふけりながら向う側へと歩いて行った。

通りで

カレー

その女性を初めて見た時，彼女は「上流階級の人である」と勝手に想像した——そして更に，第二の疑問の余地のないものとして，彼女は未亡人であり，うちひしがれた表情をしていることもまた明らかであると思いこんだ——しかしそれ以上はもう考えないでいた。つまりわたしは，わたしにとって心地良いこの状況を説明する理由を充分手に入れたので——仮に彼女が真夜中までわたしのそばにより添って坐っていたとしても，わたしは自分の見方に忠実であって，彼女をただそのような総括的な考えだけで眺めていたであろう。

彼女がわたしから20歩離れるか離れないうちに，わたしの身内で何物かがもっと特別の探求を求めたのであった——それは，彼女がもっと離れ去ってしまうのではないか，という考えを引きおこした——つまりわたしは彼女にもう会えないかも知れない——そして愛情というものは出来るだけものに執着するのが常である。だからわたしは彼女に再び会えないものなら，わたしの願いが彼女に通じる手がかりが欲しいと思った。一言で言えば，彼女の名前——彼女の家名——彼女の身分とかが知りたかったのである。また，彼女が行こうとしている所は分ったので，一体どこから来たのかが知りたかった。しかしそういうことを知る方法はまったく無かった。それに色んな細かい遠慮が邪魔をしていた。それでわたしはいくつもの計画をたててみた——男が女に直接そんなことを訊ねることは出来ない——つまり事態は絶望的であった。

一人の小柄な「品のいい（デボネーク）」フランス人の陸軍大尉が，通りを踊るような足どりでやって来ると，そんなことはいとも簡単なことである，ということをわたしに示してくれた。というのは，その女性が丁度馬車置場の戸口に引き返して来た時，わたし達の間に不意に割りこんで来たかと思うと，わたしに自己紹介して近づきになることを求め，まだ自分の名前を全部名のり切らない内に，その女性に紹介してくれとわたしに頼んだのである——わたし自身まだ自己紹介していなかったのに——すると彼女に向き直って，パリからお出でになったのですかと訊ね，わたしの紹介を経るのと同じことを自分でやってのけたのである。

――いいえ，そちらへ行く道を行くところですの，と彼女は言った。――「ロンドン(ヴネート パド ロンドル)からお出でになったのですか？」――いいえ違います，と彼女は答えた――それじゃ，奥さんフランダースを通って来たんでしょうね。――「きっと(アパラマン)フランドル(ヴゼート フラマンド)のお方ですね？」とその大尉は言った。――女性はそうですと答えた。――「おそらく(プテートル)リール(ドリール)の方でしょうね？」と彼がつけ加えた――リールの者ではありません，と彼女は言った。――アラースじゃありませんか？――それともカンブレ？――でなければケントあるいはブラッセルの人では？　ブラッセルからですわ，と彼女は答えて言った。

自分はこの間の戦斗でブラッセル砲撃に参加する栄を得た者である――また，ブラッセルは砲撃に適した位置にあり――プロシヤの軍勢がフランス軍に駆逐された時には，たくさんの貴族達がいた，とその大尉は述べた（その時その女性は軽く会釈した)――そんな具合で，彼女に戦斗の模様や彼のたてた手柄話などを語ってきかせると――彼女の名前を教えて頂きたいと頼み――それから一礼した。

「それで(エ)奥さん(マダム)には御主人(アソンマリ)がおありなんですか？」――彼は二歩歩くと振り返ってそう言ったが――答えるのも待たないで――通りを踊るように歩き去った。

わたしが立派な行儀作法を学ぶのに七年間弟子入りしたとしても，とてもこんなにうまく振舞えるようにはなれまい。

馬車置場

カレー

小柄なフランスの大尉が立ち去ると，デサン氏が馬車置場の鍵を手にして戻って来て，早速わたし達を馬車の車庫の中へ入れてくれた。

デサン氏が馬車置場の扉を開いた時，まっさきにわたしの眼を捉えたものは，もう一台の古いくたびれ切った一人乗馬車(デソブリジヤン)であった。しかもそれは，ほんの一時間前駐車場で非常にわたしの気に入ったものと瓜二つの馬車だったにも拘らず――いまはそれを一目見ると不愉快な思いがわたしの心におこった。そして，こんな馬車を作ろうと初めに思いついた者は，なんていやらしい奴だと考えた。

それに，こんな馬車を使ってみようと考える奴は，尚更我慢が出来ないと思った。

その女性もわたし同様この馬車が気に入らないものと見受けられた。そこでデサン氏は，竝んで置いてある二台の馬車にわたし達を案内して，その馬車をすすめると，これは「大陸旅行」に出かけるためにA卿とB卿にお買い上げ頂いたものだが，パリまでしか行っていないので，どの点から見ても新品同様であると言った。——それはあまり立派すぎた——そこでわたしは，その後に置いてある三番目の馬車の方へ移って，すぐさま値段をかけ合い始めた——しかしこれは二人はちょっと乗れないね，とわたしは扉を開け中に入りながら言った——どうぞ奥様お乗り下さいまし，とデサン氏は彼女に腕をかそうとしながら言った——女性は一瞬ためらったが，中に乗って来た。ところが丁度その時，宿の給仕がデサン氏に話しがあると手招きしたので，彼は馬車の扉をきちんとしめて，わたし達を残して行ってしまった。

馬車置場

カレー

「なんておかしいんでしょう」，とその女性はほほえみながら言った，ちょっとした偶然から二人だけでとり残されるのがこれで二回目であることを考えると，おかしかったのである——「なんておかしいんでしょうね」，と彼女は言った——

——おかしい以外の何物でもありませんね，とわたしは言った，フランスの伊達男達が情事にお定りのあの可笑しいやリロ——一目惚れして次はもう結婚申し込みという手口が一つ不足していると言えば言えますが。

それがフランス人の「長所」ですわ，と彼女は答えた。

すくなくともそう思われていますね——そしてどうしてそういうことになっているのかわたしには分りませんが，とわたしは続けて言った。しかしフランス人はほかの国民よりも，恋というものをもっとよく理解しもっとうまくやってのけるという名声を博しています。ところがわたしに言わせれば，彼らはまったくひどい不器用な連中だと思うんですよ。しかも実際に恋の神キューピッ

ドを一番じれったがらせる最底の射手ですね。

——「一時の心の動き」から恋するなんて，考えても御覧なさい！

残り布から気の利いた服を作ろうというのと同じように，馬鹿げたものに思えます——一目見て——ぱっと——恋を誓うなんて——恋の告白と自分自身とをまだ熟してない相手の心の判断にゆだねて，取り調べを受けることになるんですからね。

女性は，わたしが先を続けるのを期待するかのように，耳をそばだてていた。

それで奥さん，考えてみて下さい，わたしは彼女の手に自分の手をそっと置いて話を続けた——

きまじめな人は世間の評判を気にして恋を嫌います——

利己的な人は自分の為にならないと恋を嫌います——

偽善者は神をおそれて——

そしてわたし達は，みんな年寄りでも若者でも，ただの「砲撃の音」つまり世間の噂で，傷つくというよりその十倍もすくんでしまうものです——口に出さないで苦しくなってくる時から一二時間もたたない内に，愛の言葉を唇にのせてしまうなんて，この道での無智をまるでさらけ出しているんです。相手をおどかすほどはっきりしたものでなく——かと言って誤解されるほどあいまいでなく——時折親切な様子をみせるがそれでいてまるで口には出さず——細かい心づかいを見せてあとは自然を相手の心にまかせておけば，想う女性はおのづから自然の情にほだされるというわけです。——

そうすると，まじめな話，あなたはここずっとわたくしをくどいていらしたのね——その女性は顔を赤らめながら言った。

馬車置場

カレー

デサン氏は戻って来てわたし達を馬車から出し，その女性に，お兄様のL——伯爵が丁度宿に御到着になったことを告げた。わたしはその女性にはかり知れない好意を持っていたが，これを聞いて心で喜んだとは言えない——しかも当然彼女にそう言わないわけにはいかなかった——奥さん，あなたに申し上げよ

うと思っていた申し出にとっては，これは致命的ですね，とわたしは言った——

——その申し出がどんなことか，おっしゃる必要はありませんわ，彼女はわたしをさえぎり，彼女の手をわたしの両手にのせて言った。——そう，男の人が女性に何か申し出をなさろうとする時には，必ず女性にはその前にその予感があるものですもの——

すぐ準備態勢が整えられるよう自然がそういうものを女性にさづけたんですね，とわたしは言った——でもわたくしは何も悪い予感はしませんでしたわ，と彼女はわたしの顔を見ながら言った——正直に申しあげれば，あなたの申出をお受けしようと思っていましたの。——もしお受けしていたら——(そう言うと彼女は一寸口ごもって)——あなたの御好意からきっとわたくしは自分の身の上話をお話ししたかも知れません。そうしたら，同情というものがこの旅行で唯一の危険なものになったでしょうね。

こう言って，彼女はわたしに彼女の手に二度唇を触れることを許し，不安の入りまじった感受性に溢れた表情を見せて，馬車から降り，別れを告げた。

通りにて

カレー

わたしは生れてこのかた，こんなにもたやすく12ギニーもの買物をしたことはなかった。つまり彼女を失ったことで，時間は重く一向に進まないように感じられ，何か用事をしないことには，一瞬一瞬が二倍にも感じられることに気がついて——すぐに駅馬車を仕立てることを命じ，それから宿の方へ歩いて行った。

おやおや！　とわたしは呟いた。町の時計が四時を打つのを聞いて，わたしはまだカレーに来てから一時間足らずしか経っていないことを思い出したのである。

——あらゆることに心の興味を示し，旅の途中でつねに時と機会とがさし出してくれるものは何んでも見ようとする眼を持ち，「充分」手の届くものは何一つとり逃すことのない人間は，こんな人生の短かい時間にも，非常に多くの珍らしい体験をつむことが出来るものだ。——

——もし一つのことがたいしたものにならなかったとしても——別のことが役に立つであろう——それはそれとして——なんでも一つ一つが人間の心の試練なのである——骨折損のくたびれもうけもある——それで充分ではないか——体験の喜びは，わたしの感覚と情熱の最良の部分を目覚めさせ，その野卑な部分を睡らしておいてくれる。

わたしは，パレスチナの北端「ダン」から南端「ビアシーバ」まで旅をして，こりやまるで不毛の地だ，と叫んだ男をあわれに思う者である——たしかに不毛の土地であろう。そうして，その土地で出来る果実を栽培しようとしない者にとっては，全世界が不毛の土地である。わたしは両手を思いきりたたいて言った，もしわたしが砂漠にいたとしても，わたしは自分の愛情を呼びさますものをそこに見つけることが出来ると断言する——うまくいかない場合には，なにか美しい天人花に愛情をそそぐとか，憂うつそうな糸杉を求めて心を寄せるとかするだろう——わたしはそういう樹々の木蔭を求め，木蔭をかしてかばってくれたことに心から感謝するだろう——わたしはそれらの樹々に自分の名前をほりつけ，砂漠の中で最も美しい木であると誓って讃えるだろう。そしてもしそれらの樹々の葉が枯れれば，わたしはすすんで哀悼の意を表し，それらが喜びに息づけば，わたくしも共に喜びに酔おう。

博学のスメルフアンガス[1]は，ブローニュからパリへ——パリからローマへ——ローマからどこそこへと次々に旅をしたが——脾臓の病と黄だんにかかって出発したために，彼が出会うあらゆるものは色あせゆがんで見えたのである——彼はそれらの記録を書いたが，それは彼のみじめな感情の説明にすぎなかった。

パルティノンの大玄関でわたしはスメルフアンガスと出会った——彼は丁度出てくるところだった——「ばかでかい斗鶏場にすぎないよ*」と彼は言った——メジチのヴィーナスのことをあれ以上悪く言わないでもらいたいね，とわたしは答えた——というのは，フローレンスを通った時彼がその女神像をやっつけて，全然怒る理由もないのに，ヴィーナスをそこいらの娼婦よりももっとひどく扱ったということを聞いていたからであった，

トリノでわたしはまたスメルファンガスにひょっこり出会ったが，彼は帰国

の途中だった。そして彼はあわれな体験をもの哀しく語ってくれたが，「その中で，彼は海路と陸路での色々な哀しい出来事や，お互いに食い合うという共食族，つまり食人種について話してくれた」――彼は立ち寄った宿場のいたる所で，生きたまた皮をひんむかれ，虐待され，聖バーソロミユよりひどい仕打ちを受けていたというのであった――

――これを世間に知らせてやるぞ，とスメルファンガスは大声で喚いたのである。君のかかりつけの医者に知らせた方がいいよ，わたしはそう言った。

巨万の富を持つマンダンガス[2]は，大陸を旅行した。つまり，ローマからナポリへ――ナポリからベニスへ――ベニスからウィーンへ――それからドレスデンへ，さらにベルリンへ，といった風に旅をしたが，たった一つの腹をわったつき合いもなければ，語るに足る楽しい逸話もなかった。それどころか，彼は愛や同情によって道を踏みはづすことのないよう，右も左も見ないで，ただまっ直ぐ旅行したのである。

平安というものがあるなら，彼らに平安のあらんことを！　しかしそんな性質を持っていても天国へ行くことが出来るのなら，天国自体は平安を与える相手に不足はしないだろう――，あらゆる天使は彼らの到着を迎えて愛の翼に乗って飛んで来る――スメルフアンガスやマンダンガスの魂には，喜びに溢れた祝歌や愛の新鮮な歓喜や，彼ら共通の至福に対する新鮮な祝い言葉だけが聞えるだろう――けれどもわたしは心から彼らを哀れに思うのである。彼らはこの種のことにふさわしい能力を何一つ持ち合わせていないからである。だからたとえ天国で，スメルファンガスとマンダンガスとに最も楽しい館があてがわれても，彼らは到底楽しみなんかは感じないで，彼ら両名の魂は天国で永遠に苦行を続けることになるであろう。

＊（原注）ヴィド・S――の旅行記参照

モントルイユ

わたしは一度馬車の後部から旅行鞄を落とし，なくしたことがあり，二度雨の中でそれを拾おうと降りたことがあるが，その中一度はぬかるみに膝までつかって御車が鞄を馬車にしばりつけるを手伝ったものである。それでもわたし

は何が不足しているのか，さっぱり気がつかなかった——モントルイユに着き，宿の主人に召使は要りませんかと訊かれた時，始めてそれこそわたしの不足しているものだということが思い浮んだのである。

召使だって！　それこそ是非とも入り要なものだよ，とわたしは言った——と申しますのは旦那(ムッシュ)様，イギリスのお方にお仕えする光栄にあづかりたいという利口な若者がおりまして，と宿の主人が言った——だけど，どうしてよりによってイギリス人がいいのかね？——イギリスの方は気前がよろしいので御座います，と主人は言った——これで一リーヴル財布から出て行かなかったら，今晩射ち殺されたって本望だ，とわたしは腹の中で思った——それにイギリスの方々は気前よく出来る財力がおありなんでよす，旦那(ムッシュ)様，と主人はつけ加えた——これじゃもう一リーヴル出せってことか，とわたしは独りごちた——昨晩のことでしたが，「イギリスのさる旦那様は女給仕に銀貨を下さったんですよ」，と主人が話した——「ジャナトーヌ(タンピール マドモアゼル ジャナトーヌ)さんには残念(タンピ)なことだったね」，とわたしは言った。

ところでこのジャナトーヌというのは宿の主人の娘なのだが，主人はわたしがフランス語のよく出来ないことを察して，それは「残念(タンピ)」だと言わず——それは「結構(タンミュ)」だと言わなくてはいけないと教えてくれた。なにか手に入った時は，これは「結構(タンミュ)」と申すべきで，なにも手に入らない時には，これは「残念(タンピ)」と申さなくてはいけません。どっちだって同じここじゃないか，とわたしは言った。「失礼(パルドシネモア)ですが」それは違います，と主人は答えた。

これ以上の良い機会はないと思いますので申し上げておきますが，タンピとタンミュとはフランス語会話の中でも大きなかなめとなる二つの言葉ですので，外国の方はパリに着く前にこれを正しく使用出来るようになされておくと便利と存じます。

あるせっかちなフランスの候爵が，おたくの国の大使に招かれての宴席で，H——氏に向って，あなたは詩人のH——さんですか？　とお訊ねになりました。H——氏がいいえ違います——とおだやかに答えると——そりや「残念(タンピ)」ですな，と候爵は申されました。

この方は歴史家のH——さんです，と別の人が教えてあげました——候爵は

それは「結構(タンミュ)」ですな，とお答えになりました。この二つの言葉に対して，H——氏は人並みすぐれた心の持主ですから，どっちにも感謝の意を表したということです。

こんな風にして宿の主人はわたしの誤りを直してくれると，ラフルールを呼び出した。そのラフルールというのが，主人が話した若者の名前であった——主人は最初次のことだけを話した。この男の才能については，なにも申し上げないでおきましょう——この男がなんに向いているかは，旦那様(ムッシュ)が一番よくお分かりになります。ただしラフルールの忠実なことは，わたくしが誓って保証いたします。

その主人はうまく話をもちかけてきたので，わたしはすぐにことを決めてしまおうと決心した——そして，外に待っていたラフルールが素直な心を持った者なら誰でもそれぞれに感じるあの息を呑む思いの期待感をいだいて，部屋の中へ入って来た。

モントルイユ

わたしはあらゆる種類の人間に一目惚れしてしまう傾向がある。しかし一人のとるに足らぬ人間が，わたしのようにまったくとるに足らぬ人間に仕えようとやって来たとあっては，尚更のことである。そしてわたしは自分のこの弱点をよく知っているので，いつも自分の判断に計算そのものからいく分割り引きをするようにしている——しかもその時の気分や事情によって割り引きを多くしたり少くしたりするわけだけだが——それにわたしが雇おうとする人物が女性であるかどうかにもよることをつけ加えておこう。

ラフルールが入って来た時，出来るだけ割り引きしてみたが，その男の純真な顔付きと態度とは，直ちに事態を彼に有利に決定してしまった。そこでわたしは先づ彼を雇うことにして——それから彼に何が出来るのかを調べ始めることにした。しかし何かと必要に応じてこの男の才能を見つけて行こう——その上フランス人は何んでも出来るんだから，とわたしは呟やいた。

ところでこの哀れなラフルールは，大鼓をたたくことと横笛で行進曲を一二曲吹くこと以外は，まったく何一つ出来ないのであった。わたしは彼の才能で

間に合うようにしようと決めるほかはなかった。それでこう決めた時ほど，わたしの弱点がわたしの智恵によってひどく阿呆扱いされたことはなかったのである。

ラフルールは，たいていのフランス人がするように，雄々しく二三年「軍隊勤め」をすることで若くして世の中に出たのであった。そして勤務も終り頃になると，報国の熱情も満ち足り，さらに，大鼓をたたく栄誉も自分に別段はなばなしい道を拓くわけでなく，ただそれだけのことと分ったので——彼は軍隊をやめ「国に帰り」，「神の御意のままに」生活を始めた——つまりは，無一文で暮し始めたのである。

——それでわたしの「智恵」は次のように言った，お前はフランスとイタリーの旅に大鼓たたきを雇ったわけだ！　ちえっ！　とわたしは答えて言った，イギリスの紳士方の半分もが，ただの無駄飯食いをこれと同じ所をまわる「旅行のお伴」につれて，その上費用を全部持つようなことをしてるじゃないか？人はこのような勝負にならない争いの場には，「曖昧な言葉を使う」ことでなんとか切り抜けられれば——まんざら負けたわけでもないのである——わたしは言ってみた，ラフルール君，ほかに何か出来ないのかい？——「ええ出来ますとも」——脚絆も作れますし，バイオリンもすこし弾けます——そりゃ素晴らしいもんだ！　と「知恵」が叫んだ——そうかい，わたしはベースが弾けるんだ，わたしは言った——うまく合奏してみようよ。——ところで君は髭をそったり鬢の手入れを一寸出来るかい，ラフルール君——大いにやってみる気はありますが——それで神様も充分御満足だ！　と彼の言葉をさえぎって言った——それにわたしだって当然満足すべきだからね——そこで夕食が運ばれてきて，わたしの椅子の片側には元気のいいイギリススパニエル犬がひかえ，片側にはこの世で見られないような陽気な表情を満面に堪えたフランス人の従者をしたがえていると——わたしはわが帝国に心から満足であった。だからもし専制君主方が御自分の欲しいものを御自覚になれば，わたし同様御満足なされるであろう。

モントルイユ

ラフルールはわたして共にフランスとイタリーの全旅行を歩き，しばしば舞

台に登場するので，以下彼について次のように伝えて，彼のためにもうすこし読者の興味をかき立てておかなければならない。わたしはこの男に関するほど，日頃わたしの気持を決定づける衝動というものを，のちのちまで後悔する理由を持たなかったことはない——哲学者のお供をしてとぼとぼ歩いた者の中では，彼ほど忠実で愛情深く純粋な心を持った者はなかった。また，大鼓をたたいたり脚絆を作ったりする彼の才能は，それ自体非常に立派なものだったが，たまたまわたしにはあまり役に立たなかった。とは言うものの，彼の性質の陽気さによってそれは度々償われたのである——そしてそれはあらゆる欠点を補い——わたしは自分のあらゆる困難や困窮にあっても，彼の容貌にいつも助けとなるものを見出したし——彼自身の場合もそうであったとつけ加えたくなる。がしかしラフルールは何事にも頓着しない男であった。というのは，腹がへろうが喉がかわこうが，寒かろうが裸かであろうが徹夜しようが，とにかくわれわれの旅行中にどんな種類の悪運がラフルールを見舞おうと，彼の顔付きにはそんなものを暗示するどんな表情も見えなかった——彼は何時でも変りがなかった。それでもしわたしが，時折悪魔の奴がわたしに思いつかせるのだが，一寸した哲学者であると自任すれば，次のように反省するといつもわたしの得意満面の自負はしぼんでしまうのである。つまりこのとるに足らぬ男の調和のとれた哲学を想うと，わが身が恥づかしくなり，もっとましな哲学者になれるという点で，わたしはラフルールに甚大なお蔭をこうむっているのだ。こういう次第にも拘らずラフルールは一寸洒落者風のきざしがあった——しかし彼を一目みれば，彼がわざと洒落者を気取るというより天性の洒落者であることが分ったし，彼とパリへ行って三日とたたぬ内に——彼はまったく洒落者とは思えなくなったのである。

モントルイユ

翌朝ラフルールは職務についたので，わたしは六枚のシャツと一着の絹のズボンのリストをつけて旅行鞄の鍵を彼に渡した。そして荷物をみな馬車にしばりつけ——馬を馬車につけるように命じ——宿の主人に勘定書を持ってくるようにと頼んだ。

「あいつは運のいい男ですよ」，主人は窓越しに六人ばかりの娘達を指さして言った。彼女達は御者が馬を引き出している間に，ラフルールをとり巻いてまったくしみじみと彼に別れを告げているのであった。ラフルールは娘達の手にぐるりと何度も何度も接吻し，三度目頭をぬぐい，娘達みんなにローマから免罪符を買ってきてやろうと三度約束した。

主人が言うには，あの男は町中の人達に好かれていて，このモントルイユで彼がいなくても淋しいと思えない場所はどこにもありません。それで彼はこの世で一つの災難をかかえているんです，主人は続けて言った，「彼はいつも恋してるんですよ」。——そりや本当にうれしいことじゃないか，とわたしは言った——毎晩頭の下にズボンを敷いて「用心する手数がはぶけるからね。」こう言うと，わたしはラフルールに讃辞（エロージ）を呈したというより，自分自身を讃めたことになる。というのは，わたしは殆んど生涯を通じてあちこちの王女様達と恋をしており，これからも続けていこうと願っており，もしわたしが卑しい所業をするなら，一つの恋と別の恋との間の休み時間にするに違いないと固く信じこんでいるからである。そしてこの空白期間の続く間は，わたしはつねに心に鍵が掛っているものと思われ——みじめな生活をしている者にも六ペンスさえやる気になれない。だから出来るだけそういう期間から脱け出し，そうなって恋の火が再びともされると，わたしはまた寛大と善意そのものになってしまい，誰の為にでも誰と共にでも，その人達がそうすることに何の罪もないことをわたしに納得させてくれる限り，この世のどんなことでもやってのけようと思うのだ。

——ところがこうは申しても——わたしは恋の情熱を讃えているので——自分自身を賞めているわけでないのは確かなのです。

断片[3)]

——アブデラの町は，デモクリトスがそこに住んで，その町の評判をとり戻そうと皮肉と笑いの全力を傾けたにも拘らず，トラキア全土でも最も邪悪で放縦な町であった。毒殺，陰謀，暗殺などが横行し——中傷文や落首が流布し騒動は絶えず，日中でもその町に足を踏み入れることは出来なかった——夜とも

なれば尚更のことであった。

事態が最悪となった折しも，アブデラの町でユウリピデスの作品「アンドロメダ」[4]が上演されることとなり，観客はこぞってこの芝居を楽しんだ。しかし彼ら観客を喜ばしたすべての章句の中で，詩人ユウリピデスがパーシューズの哀切極まる斗白におのずから織りなした優雅な言葉ほど，観客の想像力をゆさぶったものはなかった。それは，

「おおキューピッドよ，神と人の御子よ云々。」というものであった。翌日は町の者誰もが殆んど純粋な抑揚調(アイアイビック)だけで話をし，パーシューズの哀調あふれる言葉——「おおキューピッドよ，神と人の御子よ」という文句だけを語り——アブデラの町の通りという通り，家という家では——「おおキューピッド！ キューピッド！」と人々は口々に唱え，唱えようと思うが思うまいが，口の端からうもれる自然の美しい音楽のようであった——聞えるものは「キューピッド！ キューピッド！　神と人の御子」の言葉だけ——火は更にひろがり——さながら一人の人の心の如くに，その町すべてが恋の神を迎え入れた。

いかなる薬屋も一粒の漢方薬さえ売れず——一人の武具師も一本の業物をも鍛える気にならなかったし——友情と美徳とが通りで出会い接吻し合い——黄金時代が舞い戻ってアブデラの町を覆い——アブデラの男達はみな麦笛を吹き，女はみな紅い布を織る機から離れて，しとやかに坐り直してその唄に耳を傾けた——

この断片の語るところによれば，この事実は，天より地に至り更に海の底に広がる領土を独りしろしめす，神の御威光の致すところであったと言う。

モントルイユ

準備万端ととのい，宿の勘定書の項目が一つ一つあらためられ支払いが済むと，その点検ですこし向っ腹を立てない限り，戸口の所にはいつもきまって或る問題が待っていて，馬車に乗りこむ前に，これを始末しなければならない。それは食わずの男や女達のことで，彼らが旅行者を取り巻く。

「地獄へでも行っちまえ」とつつぱねてしまってはいけない——数多くもないこういうみじめな連中を地獄へやってしまうのは残酷な旅であり，そんな仕

打ちを受けなくても，彼らは充分苦しい目に会っているのだ。それでわたしは，何スウかを財布から出して手に持っていた方が良いといっも思っている。だからすべてのおだやかな旅行者には，そういう風にしなさいとわたしはおすすめしたい。彼らに施こしをする理由をきめるのに，そう固いことを言う必要はないと思う——そういうことは，ほかの場所つまり神の御許に記録されるのだからである。

わたしと言えば，わたしほどほんの僅かしか施こしをしない者はほかにあるまい。というのは，わたしほど施こす金が僅かしかない者は事実ほかに殆んどいないからだ。けれども，これがフランスで最初にする公衆の面前での慈善行為なので，それだけこの施こしを大事に考えたのである。

さてどうしたものか！ 多いも少いもわたしは八スウしか持っていないんだ，手にした小銭を見せて言った，しかもこれに対するに，男八人，女八人の貧しい人達がいる。

シャツもつけずにぼろをまとっている一人の哀れっぽい男が，その群から二歩さがり辞退のお辞儀をするとすぐに彼の要求を引っ込めた。仮に芝居小屋の平土間にいる連中が，一せいに「御婦人方に席をどうぞ，」と叫んだとしても，女性に対する尊敬の念をこの男の半分も効果的に伝えることは出来なかったろう。

天なる神よ！　いかなる賢こき理由によって，ほかの国々ではあれほど相容れぬ乞食根性と優雅さとを，この国では融け合うよう御配慮されているのでしょうか？

——ただ単に「謙譲の美徳」だけのために，わたしは彼に一スウをどうにか納めさせた。

小柄で育ちのとまったような，それでいて威勢のいい男が，群の中でもわたしの真向いに立っていたが，もとはちゃんとした帽子であったようなものを小脇にはさむと，ポケットからかぎ煙草入れを取り出し，両側にいる者に気前良く一つまみ差し出した。しかしそれはたいへんな贈物であったので，謹しんで辞退された——その貧しい小男は遠慮しないようにとうなづいて，煙草を強くすすめた——「一服やってくれよ，さあどうぞ」，と別の方を見ながら言ったの

で，彼らはめいめい一つまみ御馳走になった——一スウ分なくなっては気の毒だ！　とわたしは独り言を言って，二スウを彼の煙草入れの中に入れてやり——その金の価値を増すためにそこからちょっと煙草をつまんだ——彼は最初の恩恵よりも二番目の方の重さを感じたが——それは彼に名誉を与えたわけで——初めのはただ彼に慈善を施こしただけであったからである——そこで彼はそのために地面につかんばかりに深くお辞儀をした。

——さあ！　あなたに二スウやるよ，わたしは片手のない老兵に言った。彼は戦役に従軍し，軍務で死ぬほど身体をすり減らして来たのだった——「国王万歳！」と老兵は言った。

そうするともう三スウしか残っていなかった。そこで単に「神の御慈悲として」一スウを与えたが，こんどは慈善をたよって物乞いされたからである——その哀れな老婆は腰の骨がはづれていたので，そのほかのどんな動機よりも充分であったわけである。

「お情け深い旦那様」——こうほめられては抗しがたいね，とわたしは言った。

「イギリスの旦那様」——この言葉の響きだけでも金をやる価値は充分ある——そこでわたしは「最後の一スウをそれに対して」やってしまった。しかし金を恵むことに熱心のあまり，「落ちぶれて遠慮深くなった人」を見過ごしていた。というのは，その人の為に一スウ恵んで下さいと言ってくれる人はなし，自分の為に一スウ物乞いする位なら死んでしまっているだろうとわたしには信じられた人物だったからである。彼は人群れからちょっと離れて馬車のそばに立っていたが，むかしは相当の暮しとしていたと思われる面立ちの顔から涙を拭っていた——これはしまった！　とわたしは思わず呟いた——彼にやる一スウももう残っていなかった——しかしお前は1,000スウも持っているではないか！　人情の全勢力がわたしの内部で奮起して叫んだのである——そこでわたしは彼にお金をあげた——いくらだったか訊くのは野暮——いま「いくら」と言うのも恥かしい思いがするし——その時もなんてすくないのかと考えて恥かしい思いがしたのだから。ですから，読者がわたしの気持をなんなりと推測がお出来になるなら，この二点をお教えしますから，一リーヴルと二リーヴル

の範囲内で正確な全額を御判定下さい。

ほかの者には一文も恵む余裕がなかったので，ただ「神の祝福がありますように」と言うより仕方がなかった——「あなた様にも慈悲深い神の祝福がありますように」と老兵や小男などが言ってくれた。「落ちぶれて弱気の人」は，何も言わずに小さなハンカチを取り出して向うをむくと，顔をぬぐった——それでわたしは，彼が誰よりもわたしに感謝しているのだと思ったのである。

馬（ビデ）

こういった小さい問題をすべて解決して馬車に乗り込んだが，わたしは生れてこのかたこんなにも晴々とした気持で駅馬車に乗ったことはなかった。そしてラフルールは，片方の大きな膝までの深長靴を小さな「馬（ビデ）」* の右側に置き，もう一方を左側に置き(というのはわたしは彼の脚などどうでもいいので)——まるで王子様のように楽しげに，しかも凛凛しくわたしの前をだくで乗り進んで行った。——

——しかしこの芝居の書き割りのような世の中で何が一体幸福というのか！何が一体偉大だというのだろうか！　わたし達が5キロと進まないうちに，一頭の死んだ驢馬が突然ラフルールの行手をさえぎったのである——彼の乗っている馬はどうしてもその傍を通り抜けようとはしなかった——彼と馬の間には争いがおこり，哀れにもラフルールは馬の最後の一跳ねで，たちまち長靴から脱け出して跳ねとばされたのであった。

ラフルールは，フランスの敬虔なキリスト信者らしく，畜生（デイアブル）！　とたった一言口走っただけで，この落下に堪えて，直ちに起き上ると再び馬にまたがり，今度は攻勢に転じ，まるで大鼓をたたくかのように馬を鞭でひっぱたいたのである。

その馬は道路のこちら側からあちら側へ跳びはねるかと思うと，また跳び返り——それからこっちへ跳ぶかと思うと——あっちへ跳びはね，つまりはあらゆる方角に跳びはねたが，ただし死んだ驢馬のそばへは寄りつかなかった。——ラフルールは驢馬のそばを通り抜けること，その事だけを馬に執拗に迫ったので——馬はまた彼を振り落とした。

お前の馬はどうしたんだい，ラフルール君？ とわたしは訊ねた——「こいつは世にも頑固な奴なんですよ，旦那」と彼は答えた——それじゃそんな強情な馬なら，馬の思い通りにしか進まないよ，わたしは言った——そこでラフルールは馬から離れて，それからひどく激しい一鞭をくれたので，馬はわたしの言葉を真に受けてモントルイユへ向って一目散に走り帰った。「くそったれ！」とラフルールは叫んだ。

ここで次のことを特に注目しておくのも「不適当」ではないと思う，ラフルールはこの争いの中でたった二種類の異なった感嘆詞しか使わなかった——つまり「畜生！」と「くそったれ！」という言葉であるが，フランス語には実は三種類あって，原級，比較級，最上級のように，その中のどれかが人生のあらゆる予期しない采の目に向くようになっている。

最初のもので原級とも言うべき「畜生！」という言葉は，一般にささいな出来事がたまたま期待に反するものであった時，その時の平凡な感情を表わすのに使われるものである——例えば——一度に振った采の目が二つとも同じであったり——馬が跳びはねてラフルールがころがり落ちたりした時などで——同じ理由から妻を寝取られた場合もつねに——「畜生！」である。

しかし采の目の出方，つまり事の次第が癇にさわる場合，例えば馬が逃げ去ってしまって，ラフルールを深長靴のまま置き去りにしたような場合，これは二番目の段階である。

それで，それは「くそったれ！」

それから三番目には——

——しかしここに至って，人がこの言葉を使用しないわけにはいかないとは非常な不運が訪れたに違いないし，それが無残にもフランス人のように洗練された国民を苦しめたに違いないことを思うと，わたしの心は憐みと同情とで締めつけられる思いがするのである——

おお神の力よ，苦難に際しても人の舌に雄弁の力を授けたもう神の力よ！——わたしの采の目がどうであろうとも，その時に絶叫する優雅な言葉をお授け下さい。そうすればわたしは本性のおもむくままにいたしましょう。

——しかしフランスではそんな優雅な言葉など求められるわけがないので，

一切絶叫しないで，あらゆる災難のふりかかって来るがままにする決心をした。

ラフルールはそんな決意をしたわけではないので，馬の姿が見えなくなるまで眼で追っていたが，どんな言葉で彼がこの出来事をしめくくったかは，よろしかったら読者の皆さんが御想像下さい。

深長靴をはいたままで，おびえた馬を追いかけることは出来なかったので，ラフルールを馬車の後かあるいは中に乗せる以外，ほかに手段は無かった。

わたしは後者を選び，半時間ほどして我々はナンポンの宿場へと着いた。

*（原註）駅馬のこと

ナンポン

死んだ驢馬

——それにこりゃあ，パン屑の残ったのを合切袋の中へ入れながらその男は言った——それにこりゃあ，もしお前が生きていて俺とパンを分けて食べられたら，お前の分だったんだがなあ，わたしは彼の言葉の調子から，子供に呼びかけているのだろうと思った。ところがそれは驢馬に呼びかけているのであって，その驢馬というのは道路に死んでいるのを見かけた，あのルフルールに災難を引き起した驢馬だったのである。その男は驢馬の死をひどく悲しんでいる様子で，わたしはすぐにサンチョ・パンサの驢馬に対する悲嘆を想い起したが，この男の歎きはそれよりももっと自然の情愛のこもったものであった。

その歎き悲しんでいる男は，戸口のところの石の腰掛けに腰を下ろし，驢馬の鞍敷と馬勒を片側に置いて，時々それを取りあげるかを思うと——また下に置き——それを眺めては頭を振るのであった。それから彼はパン屑を食べようとするかのように，また合切袋の中からそれを取り出し，しばらく手に持っていると——こんどはそれを驢馬のはみの上に置き，彼が作ったちょっとした馬具の細工をつくづくと眺めやり——それからまた溜息をついた。

彼の悲しみの純粋さにうたれて，人々が彼のまわりに集まり，馬の準備が出来る間ラフルールもその中に加わっていた。わたしは駅馬車の中にずっと坐っていたが，人々の頭越しに見聞することが出来た。

——男の言うには，さき頃スペインから帰って来たのであって，スペインへ

は郷里フランコニアの辺境から出掛けて行ったのであった。そして故郷へ帰る途中ここまで辿り着いた時驢馬が死んでしまったというわけであった。その場の誰もが，こんなに年老いて貧しげな人が何の用事があって故郷を離れ，そんな遠い旅に出たのか訳を知りたい様子であった。

彼の話によると，神の思召しで彼はドイツ中でもほかに見られないような三人の立派な息子に恵まれていた。しかし天然痘で一週間の中に上の二人の息子を失ってしまい，下の子も同じ病気にかかったので，彼は息子全部に死なれることをおそれて，もし神がその息子を自分から奪わなかったならば，お礼のしるしにスペインの巡礼地セントイアゴにお参りさして頂きます，という願をかけたのである。

その男はここまで身の上話をすると，思わず話をやめて自然に溢れ出てくる悲しさに身を任せて——激しく涙した。

彼は次のように言った，神様はその願いをおかなえ下さったので，このあわれな動物と一緒に家を出発しました。この驢馬は辛棒強い道連れでして——道中ずっと俺と一緒に同じパンを食べ，俺にとっちゃあ親しい仲間同然でしたよ。

まわりに立っていた人達は，みな興味深くこの哀れな男の話を聴いていた——ラフルールは彼にお金をさし出した。——しかしその男はお金は要らないと言い，悲しいのは失った驢馬の値段ではなく——驢馬を殺したことだと言った。——まったく俺になついていたんです——そう言うと，ピレネー山脈を越える道筋で出会った災難をまわりの人達に長々と話してくれた。その時彼と驢馬とは三日間離ればなれになってしまったが，その間中驢馬は彼がその動物を探し求めたように，彼のことを探し求めて，お互いにまた出会えるまで殆んど食物も飲み物も喉を通らなかったという。

でも驢馬が死んで，お前さんはすくなくとも一つは慰めとなるものがあるよ。だって情深い主人だったじゃないか，とわたしは言った。——とんでもないことです！　と彼は悲しげに答えた。あいつが生きている時はそう思っていましたが——さて死なれてしまってみると，そうでなかったと思えるんですよ。——俺の身体の重みと子供を亡くした悲しみが一緒になって，あいつには辛棒出来ない程の重荷になったに違いねえ——それがあいつのいのちを縮めてしま

ったんで，俺には償いようがねえ気がするんです——なんて恥かしいことだ！とわたしは独り呟いた——この哀れな男が一頭の驢馬を愛するほどに，我々人間がお互いに愛し合ったら——それはたいしたことなんだが。——

ナンポン

御者

この哀れな男の話によって憂いに沈んだわたしの心は，なにかやさしい扱いをして欲しかった。ところがこの御者はそんなことはちっともおかまいなく，馬車は「補装道路（パヴェ）」の上を全速力で走り出した。

アラビアの最も乾いた砂漠で，のどの渇ききった人が一杯の水を切望するよりももっと切実に，わたしはこの時静かな動きを願望したのである。だからもしこの御者が，もの思わしげな足どりでわたしをそっと連れ去ってくれたら，わたしは彼に敬意を表したであろう——ところがそれどころか，あの哀れな老人が悲嘆に満ちた話を終った途端に，そいつは馬にそれぞれ容赦のない鞭を当て，無数の悪魔があばれ出したように，車の音高く走り出したのであった。

わたしは御者に御生だからもっとゆっくりやってくれと，あらん限りの声をふりしぼって叫んだが——大声で叫べば叫ぶほど彼はますます無慈悲に全速力で馳けさせた。——御者の野郎悪魔にでもさらわれろ，それに走る馬の奴らもさらわれてしまえ——わたしは絶叫した——こいつはわたしのことを怒りでめちゃくちゃになるまで神経を引きちぎっておいて，それから速力を落としてその嬉しさを味わえっていうのか。

御者はその点まったくそつなくやってのけたものだ。つまりナンポンから五キロばかり離れた険しい丘の麓に着くまでに——彼はわたしをむちゃくちゃに怒らしてくれた——しかもその後で，わたしは彼に腹を立てたことで自分に怒りを覚えたのである。

わたしの病状はこんどは違った治療を必要とするようになった。こうなれば全速力ですっ飛ばしてくれた方が実際には有難かったろう。——

——さあ頼むから飛ばしてくれ！　どんどんすっ飛ばしてくれよ，大将，とわたしはどなった。

御者は一路丘を目指して行った——それでわたしはあの哀れなドイツ人と驢馬の話に戻ろうとしたが——もうそのきっかけを失ってしまって——御者がだく足に戻れなかったのと同様，わたしもその話に戻ることが出来なかった。——

——なにもかもおじゃんだ！　とわたしは叫んだ。そこでせいぜい禍を福に転じようとして出来るだけ素直に馬車の中に坐っていたが，それでもすることがみんな食い違ってしまった。

禍にとっては，すくなくとも自然がすすめてくれる眠りという一つの鎮痛剤がある。そこでわたしは，それを有難く自然の手から受けとって眠りに落ちた。そうしてわたしの眼を覚まさせた最初の言葉は「アミアン」であった。

——こりゃ有難い！　眼をこすりながら叫んだ——これはあの憂愁の女性が来る町じゃないか。　（続く）

注

1) スメルファンガス Sterne と同時代のイギリスの作家 Tobias George Smollett (1721-71) のこと。「フランス・イタリー旅行記」を書いているが，二人がローマで出会った事実はない。
2) マンダンガス Samuel Sharp (1700-78) イギリスの外科医をさす。「イタリー通信」を遺している。
3) 断片 Robert Burton: *Anatomy of Melancholy* (1621) から採りあげたもの。
4) アンドロメダ　古代ギリシアの悲劇詩人ユーリピデス (480-406 B.C.) の作品。ギリシア神話から題材をとっている。